

## 第 2 回加古川流域懇談会 議事概要

開催日時：平成 30 年 2 月 21 日(水)10:00～12:00

場所：加古川商工会議所 1F 展示ホール

委員出欠数：出席 6 名（途中退席 1 名）

### ～ 議事経過 ～

#### (1) 規約・公開方針の確認

事務局より加古川流域懇談会の規約、公開方針について確認がなされた。

#### (2) 進捗点検状況について

事務局より進捗点検の状況について説明がなされた。

#### (3) 主な項目の進捗状況

事務局より加古川水系河川整備計画の進捗状況について説明がなされた。主な意見および審議内容は以下のとおり。（○：委員発言，→：事務局発言）

##### 1) 進捗点検状況について

- 当初整備計画から変更して優先的に施工を行った場所はどこか。  
→ 浸水被害の大きい上流部の滝野地区等において、前倒しして集中的にこの 10 年間で実施するとした箇所がある。並行して、上流域の整備による下流域の流量増に対応するため二次掘削を前倒しして実施した箇所がある。
- 緊急的に工事を行った来住・大島地区については、河道掘削の進捗が 100%、築堤の進捗が 190%となっており、非常に進んでいるということであるが、裏返せば計画の変更があったと考えられる。どのような手続きで変更に至ったのか進捗点検結果に記載がない。
- 河川整備計画の変更について、どの時点でどのような手続きで議論されたかを明確に示して頂きたい。流域懇談会では委員に 1 年に 1 回進捗状況の報告を行うということであったと思われる。  
→ 詳細な設計等により、整備計画当初に想定していた延長より施工延長が伸びたためである。整備計画策定時点では概略的な設計であり、具体的な詳細設計を行っていく中でより治水効果を出すために整備区間の修正を行っている。当初の目標値等に変更が生じた場合は、次回の進捗報告から説明させて頂く。
- 樋門・堰の耐震照査の進捗率が低いのが、計画通りか。  
新規の水利権の許可が 4 件とあるが、どのあたりか教えて欲しい。  
平成 28 年の流量観測の欠測が 28 日と急に増えているのはなぜか。  
→ 樋門・堰の耐震照査は、対象物の数が多く優先順位をつけて実施しており、平成 28 年時点では 35%程度であるが、平成 31 年度までには全ての照査が終わる予定である。  
新規水利権は、東条川における小水力発電の 2 箇所であり、農水省と兵庫県の協同事業であるため件数としては 4 件となっている。  
国包地点の流量観測の流量は、“美囊川の合流点上流”と“美囊川”の流量を足し合わせ

で算定している。平成 28 年度は、出水等の影響により美囊川のみお筋が変化し計測が出来なかった日が発生しており、同期間は統計処理上欠測としたため、欠測が長期間に及ぶ結果となった。現状 (H29 年度以降) では掘削等の対策を行い計測箇所状況を改善している。

- 去年、加古川市から依頼を受け「姫路河川国道事務所が行っている生物の多様性の保全」という公演を行った際に、企業から「CSR として何をしたいかわからない。具体的なテーマがあればもっと参加できる。」という話があった。また、ナガボテンツキという加古川だけに生育する植物が絶滅したが、住友ゴムが栽培を続けており、かなりの株数を持っている。河川整備が終わらないと植栽しても消失してしまうということで確保して頂いている。加古川周辺には沢山の企業があるので協力が得られると思う。  
→ 沿川企業の CSR 活動についてアンテナを高くして連携していきたい。
- 水防災意識社会再構築ビジョンは意識を促す意味でも重要と思う。学校、地域だけでなく職場においても命を守る防災、減災教育を広めることや、治水を流域全体の皆で考える機会を持って総合治水対策と合わせて取り組むことが重要と思う。
- 加古川では先行して様々な小技を用いた魚道改良を実施して頂いているが、他河川等では土木技術者が設計図面を描けず、現場対応となるために頓挫するケースが多い。今後、中小河川でも追随する河川があると思うので、知見を広めて頂きたい。
- 甌穴に配慮した掘削の CG の護岸や天端の芝等、イメージがあまり良くない。施工側は CG のイメージを持つと思うので、CIM の活用について工夫して頂きたい。  
→ 多自然川づくりの考え方等も踏まえつつ、改良を検討していきたい。

## 2) 加古川における課題について

- 近年豪雨傾向にあり、加古川流域で 2 日間で総雨量 500mm が降った場合、鬼怒川の様になるのではないかと懸念している。東播磨地域はため池も多く、支流からの水も加え、中流部の堤防整備が進むと流下能力も向上し、下流側への水害リスクも高くなると思う。これまでの避難場所や経路の見直し、災害時の事業継続計画の策定が必要と思うが、特に中小企業の事業継続計画の策定状況は低いため、河川管理者からもアドバイスをして頂ければと思う。
- 河口部の底生生物の着目種について、昨年度タケノコカワニナは工事中 4 個体となっているが向島公園の方に沢山移っており、昨年夏にはハクセンシオマネキ、コメツキガニを数えられないほど確認した。底生生物は 6~9 月ぐらいが産卵期で、一旦海に卵が放出され孵化すれば 2 週間ほど経てば満ち潮に乗って戻ってくる。そのような環境が残っていればどこでも定着するものであり、工事中はそのような環境では無かったため調査結果は少なかったと思う。工事後、河口部で条件が整えば、向島公園で産卵したものが戻ってくる。
- 大規模な掘削による砂を持っていく場所は決めているのか。  
→ 東播海岸や須磨海岸の養浜や、場合によっては大阪湾の埋め立て地へ利用できないか等、土砂の置き場所を検討している。

- 船底型の河床掘削は難しいと思うが、どのように施工管理するのか。
- 実際の工事の際は、浚渫用の重機のバケットの形状による制限があり、少々凹凸が生じる形で掘削することになるが、横断方向に少しずつ移動させながら掘って、船底形に近い形で施工することになる。
  
- 3) 加古川流域懇談会委員を終えられる委員からの挨拶
- 加古川の委員会では、これまで里山で行っていたヤナギの「輪伐」を河川のヤナギに対して日本で始めて取り入れ、その後、その他の河川にも伝わっていったことが非常に印象に残っている。また、加古川ではヨドシロヘリハンミョウをはじめ、河口部の生態系の保全が重要であるので、今後も続けていただきたい。
  
- 加古川流域で暮らす住民の命、財産を守るということは重要な課題である。私自身、東播磨地域の豊かな水辺を次代に繋ぐこと活動の目的としており、流域委員会並びに流域懇談会においても加古川河口干潟について整備計画に入れて頂いたことを非常に心に残った。今後とも河口干潟でトビハゼやハクセンシオマネキが棲めるような環境を残して頂けたらと思う。
  
- 加古川の整備計画については、姫路河川国道事務所が主催する「加古川を考える会」により約10年間議論がなされ十分に議論が煮詰めることができたため、実質1年で出来上がったということが印象深い。加古川では輪伐をはじめ、日本で初めてのことを沢山やっているのです、この勢いで更に新しいことを発信していただければと思う。

以上